

鹿島建設株式会社への再度の公開書簡

（一）「花岡虐殺事件」は歴史的といえる悲惨な虐殺事件だ。もし鹿島がこれに対して誠意と反省の態度を示すことなく、残された課題を速やかに解決しないならば、必ずや世論が高まり多くの非難を受けることになる。

（二）「花岡虐殺事件」は鹿島自身の手で引き起こされたものである。その責任は他に転嫁できるものではない。当然、勇気を持って全ての責任を自ら負うべきだ。事実を覆い隠すための身勝手な理屈で責任を逃れようとすることは、鹿島の凶悪性とそれを改めようとはしていない姿勢を証明するものだ。さらに、鹿島が当時 418 人を無惨に虐殺したのは、故意であったことの証明でもある。

（三）鹿島は信用こそ命であると知るべきだ。それは一個人でも同じであり、一企業でも当然のことである。鹿島は今こそ、翻然と目覚めるべきである。既に次のような声があがっている；鹿島の富は累々たる白骨の上に築かれたものであり、どうして悲哀と憤慨を抱かずにいられるだろうか、と。

（四）鹿島には、過去を懺悔して人の道に従って責任を果たし、受難者の一切の問題について適切に対処することで、世の人々の理解と称賛を得られんことを希望する。

（五）いま心から鹿島に促そう。誠意と自覚をもって、主体的に受難者の要求に従って根本的な解決を図ること。罪悪の帳簿の中からこの血債を消し去る千載一遇の機会を逃せば、非難と告発が長く続くことになるだろう。この歴史的な血債は自然のうちに消えるものではないことを鹿島は深く考えるべきである。

受難者 1000 人の隊長 耿諄
一九九一年一月六日

（山邊悠喜子・張宏波 訳）